

## なぜ教師は「国歌斉唱・国旗掲揚の強制」に反対するのか

この記事 (<http://pdffile.cocolog-nifty.com/blog/files/55.pdf>) <クリックしてください>は、作家の故丸谷才一さんは次のように言っていたと記している。<明治から現代まで、日本人は論理的にももの考えることを軽んじている。言葉とは考えるための道具なのに、明治政府が「上から下へと命令を伝える道具」として扱ったことも、その一因。>

明治以来、富国強兵を実現するため、考えるための道具として言葉を使用することは国家により否定されてきた。つまり、言葉を使って論理的に考えること、言葉を使って議論・論議（論理を交わすこと）することは否定されてきた。そのため、例えば、「日本人なら天皇陛下を神として崇拝するのは当然。日本は神国である」「日本なら（日本の10倍の国力がある）鬼畜米国と戦っても勝てる。いざとなれば神風が吹く」「日本人ならお国のために死ぬのは当然。それをしないのは非国民」などといわれても疑問をもたなかったし、疑問をもっても議論・論議（以下、議論）の仕方が分からなかったし議論する気持ちが起こらなかったし議論することに（弾圧されるのでは、村八分にされるのではという）恐怖を覚えた。実際、人々に考えるべきだとの言葉を一言発しただけで、議論がおこらないよう言葉を発した者は投獄された（ご参照：<http://abc30.cocolog-nifty.com/blog/files/3.jpg>）。

かかる結果、日本は無謀なアジア太平洋戦争に突入、未曾有の数の日本人やアジアの人々が理不尽な死を余儀なくされた。言葉を使って議論しないことは、国をも破滅させる。

「国歌斉唱・国旗掲揚の強制」は、「なぜ国歌を斉唱し、国旗を掲揚しなければならないのか」という議論を許さないということである。つまり、有無も言わず（議論の余地なく）、国歌を斉唱させ、国旗を掲揚させることである。そこでは、「外国籍・外国人の生徒も学ぶ学校において国歌斉唱、国旗掲揚はすべきなのか」「何らかの理由で国旗掲揚・国歌斉唱をしたくない人にもそれを勧めるのはどうなのか」といった、言葉を使った議論は許されず、「国歌斉唱！国旗掲揚！一同起立！」という「上から下へと命令を伝える道具」としての言葉しかない。「日本人なら国歌斉唱、国旗掲揚は当然」「国旗国歌法という法律があるから国旗掲揚、国歌斉唱は当然（国旗国歌法は、国旗及び国歌とは何かを規定しているだけのシンプルな法律であり、国民に国旗掲揚・国歌斉唱を義務付けているものではない、にもかかわらず）」という「上から下へと命令を伝える道具」としての言葉しかない。

このように、「国歌斉唱・国旗掲揚の強制」は、言葉を使って議論することを否定するもので、戦前それが無謀なアジア太平洋戦争を引き起こしたように、国民の犠牲や国の破滅をもたらす道であるから教師は反対するのである。日本という国が破滅しないよう、日本人が犠牲者にならないようにとの、日本や日本人を愛するがゆえに反対するのである。日本や日本人を愛する心を愛国心という。強い愛国心を持っている教師ほど「国歌斉唱・国旗掲揚の強制」に強く反対している。「国歌斉唱・国旗掲揚の強制」を推進している人は、国民の犠牲や国の破滅をもたらす道を掃き清めている非愛国者・反愛国者、つまり愛国心を持たざる者だと言わざるを得ない。まさに「日本人なら国歌斉唱、国旗掲揚の強制に反対するのは当然」なのである。

現在、「国歌斉唱・国旗掲揚の強制」に伴って学校から「考えるための道具としての言語の力」が弱くなってしまった結果、意見を持つ（言語によって意見を述べる）ことは大変な苦痛となってしまう、その苦痛をもたらす生徒・学生は毛嫌いされるようになっている。そんな中で、敢えて自分の意見を述べることは周りの人に苦痛を与えることとなり、そんな苦痛を与える者は空気を読めない者とされてしまう。しかし、日本を戦後から戦前に転換させようとする戦争法（15.9.19 成立）に反対する機運が国民的に拡大する中で、考えるための道具としての言語を取り戻そうという動きも起こっている（右掲の「折々のことば」ご参照）。

～この文書は、「日の丸（国旗）・君が代（国歌）」<下記URL>に掲載されているものです～

<http://fileshef.cocolog-nifty.com/blog/2015/10/post-edc5.html> <クリックして下さい>

### 折々のことば

鷺田 清一 115

この国では意見を持つ行為そのものが、空気が読めないってことになってしまっているんです。

式で君が代を歌わない教諭を笑う友だち、気づかないふりした自分、目を垂いだ管理職。そんな苦い記憶から抜け出るためにデモに参加したと、この学生は言う。周りのコンテクト（脈絡）に自分をはめ込むのでなく、自らコンテクトを紡ぎだしてゆく。個人が一人の「市民」となるのはそこからだ。本紙7月11日の記事から。

福田和香子

2015・7・27 朝日新聞

## <追記>

「国歌斉唱・国旗掲揚の強制」（「国歌斉唱！国旗掲揚！一同起立！」などという上から下への命令）は、「外国籍・外国人の生徒も学ぶ学校において国歌斉唱、国旗掲揚はすべきなのか」「何らかの理由で国旗掲揚・国歌斉唱をしたくない人にもそれを勧めるのはどうなのか」などといったことを「考えさせない」ことです。考えなければ言論もないので、「考えさせない」ことは「何でや、と言わせない（疑義を唱えさせない。言論させない）」ことでもあります。従って、「国歌斉唱・国旗掲揚の強制」は「**考えない。それゆえ意見を持たない。それゆえ言論などで意見を表現しない**」人づくりといえます。

哲学者デカルトの有名な言葉—英語では「I think, so I am.」。日本語では「我思う、ゆえに我あり」（私は疑い、何が真実かを**考える**。それによってわたしは人間として**存在する**）。「考える」ことが「人間として存在する」ことです。つまり、考えないことは人間として存在しないことです。人間として存在しないとはどういうことでしょうか。「モノ」として存在することです。

「モノ」として存在する人に「兵士」があります。兵士は普通の人間ですから多寡はあれども考えます。「兵士」は考えない兵士のことで、考えないから「モノ」として存在し、意見も持たず、それゆえ言論など表現もしません。戦争を遂行するためには「兵士」が必要です。「兵士」とは単に武器の使用術を会得している人ではありません（自衛隊員は兵士ではあるが、そのままでは「兵士」ではありません）。武器は人を殺傷する戦争道具であるから、それを躊躇なく活用するためには兵士自らが戦争道具というモノにならなければなりません。戦争道具化した兵士とは、「（戦争とは何か、それは善か悪か、それは必要か不要か、などを）考えない、それゆえ、（戦争で死傷する）人の心や体の痛みを思わない・感じない人」または「（戦争で死傷する）人の心や体の痛みを思わない・感じない、それゆえ、（戦争とは何か、それは善か悪か、それは必要か不要か、などを）考えない人」のことをいいます。このように、**考えない・思わない・感じない兵士を「兵士」（戦争道具化した人）**といえます。

「国歌斉唱・国旗掲揚の強制」は、「兵士」予備軍を作り出すことになっています。戦前の日本では、同じようなやり方（上から下への一方的な命令）で大量の「兵士」が作り出されていったことを忘れてはなりません。

こんな主張は一部の偏向・左翼教師の主張に過ぎないと激しい批判があります。しかし、上掲の「折々のことば」を読むと、今日の日本では**「考えない。それゆえ意見を持たない。それゆえ言論などで意見を表現しない」若者が増大**していることが分かります。それをみると、「国歌斉唱・国旗掲揚の強制」は「兵士」予備軍を作り出していることは決して大げさな偏向した主張（イデオロギーに基づいて真実を歪めたデマゴギー）ではないことが分かります。

「兵士」については、

「平和を維持する・戦争をなくすために必要なことはこれではないか。」 ↓<下記URLをクリック>もご参照ください。

<http://fileshelf.cocolog-nifty.com/blog/2013/05/post-8f49.html>